演題9．下顎歯肉頬移行部に発生した脂肪腫の1例

○村田　尚子，渡邊　聡子，星　　秀樹
杉山　芳樹，関山　三郎，佐藤　泰生*
佐藤　方信*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座
同口腔病理学講座*

脂肪腫は，全身における良性腫瘍のうち発現頻度は高いものの，口腔領域ではその頻度は低い。今回我々は，下顎前歯部歯肉頬移行部に発生した脂肪腫の1例を経験したので，その概要を報告した。症例は68歳，男性であった。初診は平成10年9月28日。主訴は，$\overline{32|}$歯肉頬移行部の腫脹であった。家族歴に特記すべき事項はなかった。既往歴は約1年前より高血圧症にて加療中である。現病歴は，同年9月上旬歯科治療で通院中の某歯科医院にて32歯肉頬移行部の腫瘤指摘されたが，疼痛が無いため放置していたが，症状に改善がみられないため，同医院より本学第2補綴科を経て，当科を紹介受診した。現症は体格中等度，栄養状態は良好であった。口腔外所見は，顔色は正常，顔貌は左右非対称で，右側オトガイ部に腫脹を認めた。同部には発赤，圧痛および熱感はなかった。口腔内所見は，$\overline{32|}$歯肉頬移行部に比較的境界明瞭な拇指頭大の腫脹を認め，波動を触知した。被覆粘膜は健康粘膜色で平滑であった。初診時臨床診断は右下唇腫瘍。処置及び経過は，腫脹部に波動を触知したので試験穿刺を行ったが，内容物は吸引されなかった。同年11月30日局所麻酔下に摘出術を施行した。摘出物は，薄い被膜で覆われ，類円形で黄色を呈していた。病理組織所見は，大小不同の異型に乏しい脂肪細胞の分葉状の増生からなっており，病理診断は脂肪腫であった。術後3か月現在，再発の徴候はなく経過良好であるが，再発や悪性化の報告例もあるので長期の経過観察が必要と思われた。